

「妊娠分娩と思春期障害」

若年発症の月経異常の妊娠、分娩、産褥に及ぼす影響の調査

分担研究： 「女性の健康からみた母子保健のあり方に関する研究」

研究協力者 本庄 英雄 (京都市立医科大学産婦人科)

共同研究者 福岡 正晃 (京都市立医科大学産婦人科)

要約：これまで、思春期における月経異常が、女性のその後の妊娠分娩産褥にどのような影響をもたらすかに関する調査はほとんど行われたことがないと考えられる。この点を2つの方法で調査するアンケート方式による調査を行うべく研究を開始した。2つの方法とは1つは、過去に10代に思春期障害で受診した患者のその後の不妊、妊娠、分娩歴に関して調査すること。もう1つは現在分娩直後の患者の過去の思春期時期の異常等につき調査すること、である。現在アンケート様式、調査方法が決定し、今後調査、解析予定である。

見出し語：思春期障害、不妊症、分娩異常

研究方法：

1. 過去の思春期障害患者よりの調査

1980年1月より1985年12月までの期間に新生児を除く20歳未満の受診者につき、その受診内容を調査し、月経異常にて受診した(妊娠を除く)者に対して、以下の内容のアンケート調査を行う。

現在の月経状況、結婚状況、妊娠の有無(含不妊治療歴)、分娩の有無(含妊娠、分娩異常、授乳状況)

2. 分娩直後の入院中の患者よりの調査

当大学入院、分娩後、退院までの間にアンケート調査を行う。対象は25歳以上35歳未満とする。

結果：現在アンケート調査中であり、今後解析予定である。研究方法1の調査での1985年度における京都市立医科大学産婦人科受診の20歳未満の対象者の内訳につき報告する。

1年間に受診した人数は4481人でそのうち新生児を除く20歳未満の患者は110人(2.5%)であった。

1. その年齢構成を表1に示す。約半数が19歳で16歳以上がほぼ90%を占めた。

表1 年齢構成

年齢	人数
10～14歳	9人(8.2%)
15歳	4人(3.6%)
16歳	11人(10.0%)
17歳	15人(13.6%)
18歳	20人(18.2%)
19歳	51人(46.4%)
合計	110人

2. 受診内容につき表2に示す。約半数が何らかの月経異常で、それに続くのは妊娠および感染症であった。

表2 受診内容

項目	人数
月経異常 (無月経・月経不順など)	50人(45.5%)
妊娠	20人(18.2%)
感染症 (付属器炎・外陰腔炎・VVA [※] など)	19人(17.3%)
卵巣腫瘍	4人(3.6%)
子宮奇形等	4人(3.6%)
月経調節	4人(3.6%)
その他	9人(8.2%)
合計	110人

3. 月経異常症例50人の年齢構成を見てみるとどの年代においても約半数を占めていることになる。

表3 月経異常症例年齢別構成

年齢	月経異常症例数/症例数	
10歳	0人	1人
11歳	0人	1人
12歳	0人	1人
13歳	2人	3人
14歳	1人	3人
15歳	2人	4人
16歳	6人	11人 (54.5%)
17歳	8人	15人 (53.0%)
18歳	9人	20人 (45.0%)
19歳	22人	51人 (43.1%)
合計	50人 / 110人 (45.5%)	

4. 月経異常症例の内訳

表4 月経異常の内訳

原発性無月経	4人 (8%)
続発性無月経	28人 (56%)
月経不順・不正出血	18人 (36%)
合計	50人

考察：生涯女性の健康を考える上で、妊娠分娩等によりその後の人生、生活、精神面にとっても大きな影響を及ぼすものと考えられる。20歳以前に発症した無月経、続発性無月経、月経不順などが妊娠、分娩、産褥に影響を及ぼすと考えられるとすると、その時点で可能な対処法があれば、それが将来の健康につながると考えられる。この点を明らかにすることが、この調査の主な目的であり、有益な指標になる可能性が期待される。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:これまで、思春期における月経異常が、女性のその後の妊娠分娩産褥にどのような影響をもたらすかに関する調査はほとんど行われたことがないと考えられる。この点を2つの方法で調査するアンケート方式による調査を行うべく研究を開始した。2つの方法とは1つは、過去に10代に思春期障害で受診した患者のその後の不妊、妊娠、分娩歴に関して調査すること。もう1つは現在分娩直後の患者の過去の思春期時期の異常等につき調査すること、である。現在アンケート様式、調査方法が決定し、今後調査、解析予定である。